平成 27 年度

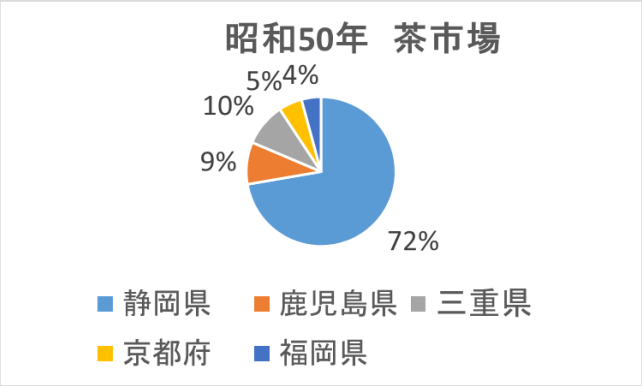
静岡茶の競争力～場所が与える影響～

1170445　田中　俊輔
指導教員　岡本　博公
高知工科大学マネジメント学部

1.　本研究の課題

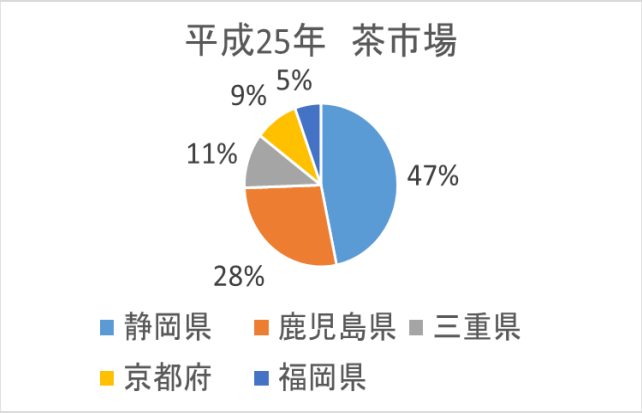
数年前、お茶市場は静岡茶が圧倒的な差でトップシェアを誇っていた。しかしながら、現在はその差が無くなってきつつある。

図表：1　昭和 50 年のお茶市場産出額の割合



出所　ふじのくに　静岡県公式ホームページ　お茶白書より作成

図表：2　平成 25 年のお茶市場産出額の割合



出所　図表：1 に同じ

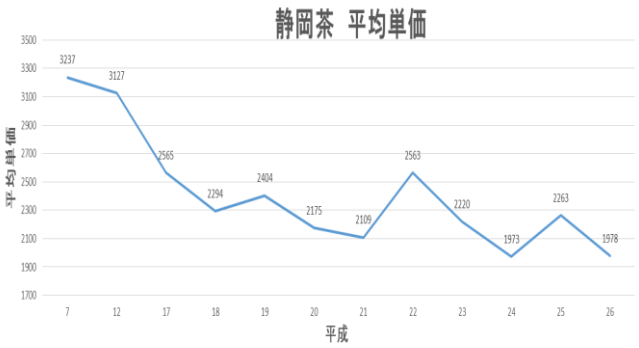
図表：1 の昭和 50 年のお茶市場では全国の 72%のシェアで静岡茶が圧倒的な差でトップを誇っていたことを示している。しかし図表：2 の平成 25 年には 47%までに静岡茶のシェアの値が減ってきている。そして 9%しかなかった鹿児島県が 28%までシェアを広げている。シェアトップの静岡茶は 72%もあったシェアがなぜここまで減ってきているのか。原因の 1 つとして、「鹿児島県の鹿児島茶に静岡県の静岡茶が価格主導権をとられているからではないか」ということを静岡茶農家のヒアリング調査で伺った。価格主導権（プライスリーダーシップ）とは「ある企業が当該市場の価格変更の先導者となり、他の企業（価格追随者）が一定期間内にこの価格に追随して全企業が同一の価格ないし秩序ある価格体系を設定する斉一的価格行動をいう。[1)]」トップシェアの静岡県の静岡茶が価格主導権を取れていない原因の 1 つとして場所による影響が大きいのではないかと考えられる。

本研究は価格主導権への場所による影響の研究をする。売上市場上位の企業（ここでは地域）がプライスリーダーシップになれない興味ある事例を検討する。

2.　現在の静岡茶の現状

現在の静岡茶の価格は 1kg 約 2000 円前後である。20 年前は 1 kg 約 3300 円であった。静岡茶は 20 年前と比べると価格が約 3 分の 2 に下落している。

図表.3　静岡茶市場一番茶平均単価推移



出所　図表：1に同じ

お茶市場シェア率が減少し、単価も下がり売上が伸び悩むようであれば、これからお茶産業をしようとする人はどんどんいなくなるだろう。今でも「1990年には静岡県で4万3240戸あったお茶農家は2010年には1万3933戸と7割も減少している[2)]。」この問題を打破しない限り将来　静岡茶産業はなくなっていくのかもしれない。

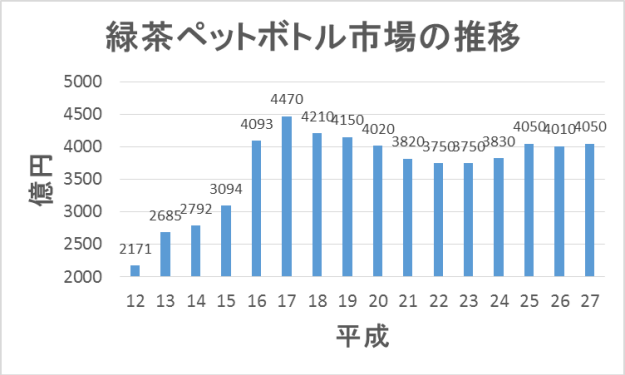
3.　静岡茶の単価減少の考察

お茶の価格設定は以下のようである。「お茶は3つのもので価格が決められている。1つ目は需要と供給のバランス、2つ目は茶葉の品質、3つ目はお茶を摘み取る時期である。[3)]」　静岡県の平均単価の減少傾向はこの3つのどれかにあてはまるのではないだろうか。

3.1　需要と供給のバランス

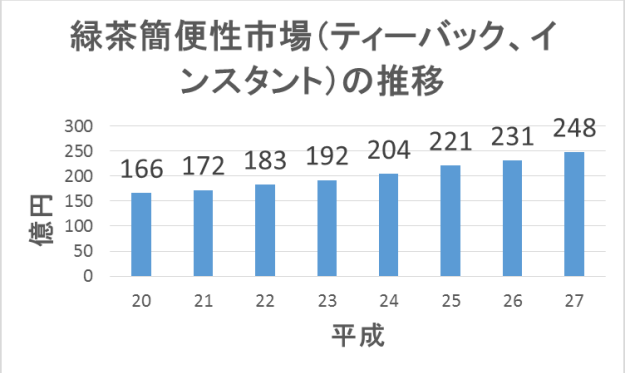
では需要と供給のバランスから見てみよう。近年、ティーパックやペットボトルなどの手間暇のかからない安価な商品が増加してきている。

図表：4　緑茶ペットボトル市場の推移



出所　伊藤園のホームページより作成

図表：5　緑茶簡便性市場（ティーバック、インスタント）の推移



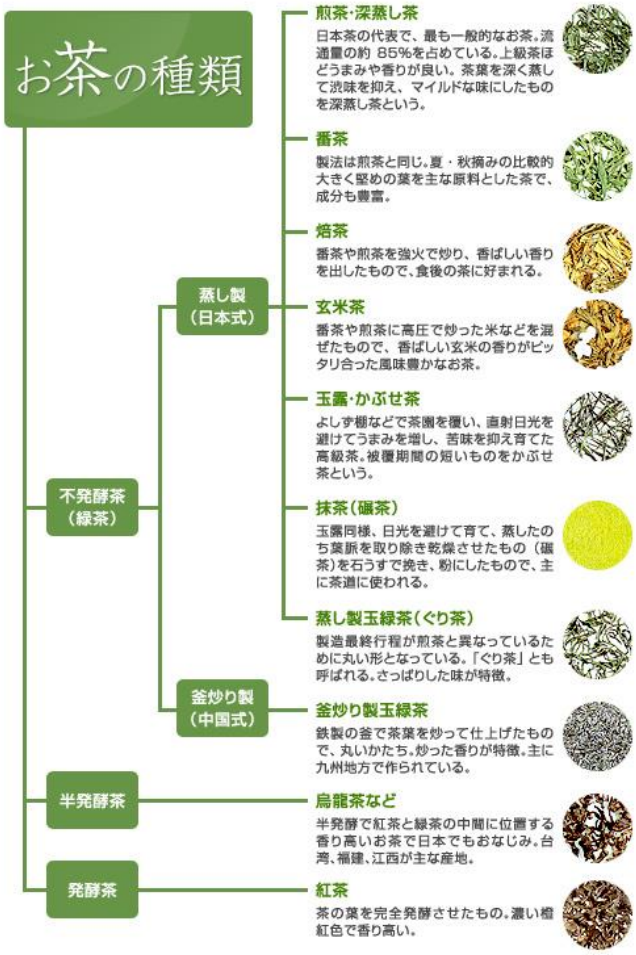
出所　図表：4に同じ

図表：4を見て分かる通り平成17年がピークではあったものの、平成12年から平成27年の15年の間に約2倍にペットボトルが普及している。ティーバックやインスタントティーも図表：5を見て分かる通り平成20年から平成27年の7年間少しずつではあるが毎年普及率は上昇している。これからもずっとティーバックやインスタントは増加傾向になっていくであろう。そうしたペットボトルやティーバックやインスタントによって若者の急須離れが問題になっている。その為、茶葉を買う消費者が減り、茶葉の需要が減少し、需要と供給のバランスが崩れてきつつある。これが単価減少として考えられる1つ目の理由である。

3.2　茶葉の品質

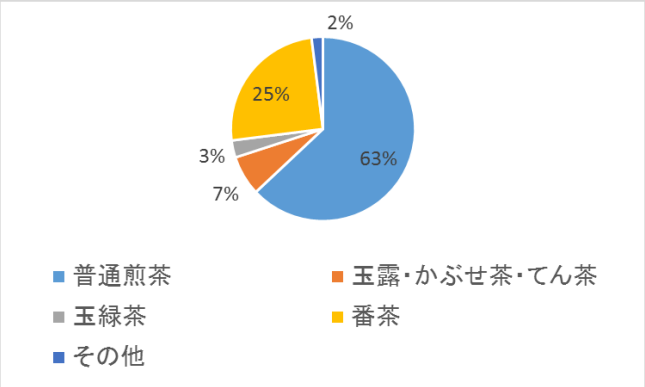
次に茶葉の品質である。「品質は外観、香気、水色、滋味の4つによって評価される。[4)]」昔と比べて外観、水色、滋味はどんどん良くなってきている。しかしそれに比べて香気の方はなくなってきている。

図表：6　お茶の種類



出所　Google　画像より引用

図表：7　2013 年　茶種別産出量



出所　お茶百貨より作成

理由としては図表 7 で分かるように現在では普通煎茶（煎茶・深蒸し茶）の深蒸し茶が一般的になり、蒸す時間を長くしたため香りが出ていってしまったと考えられる。これが 2 つ目の単価減少理由である。

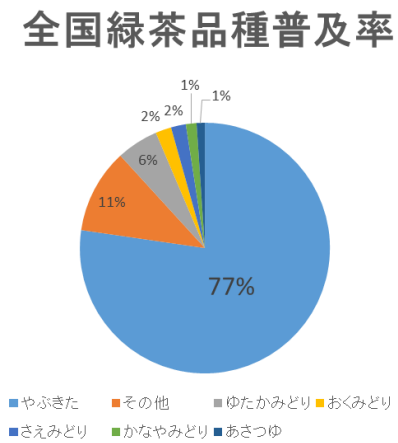
3.3　お茶を摘み取る時期

最後にお茶を摘み取る時期である。静岡茶の 1 番茶の摘採時期は 4 月中旬から 5 月中旬である。一方、鹿児島県は日本一早く新茶を摘める県として有名で、鹿児島茶の 1 番茶の摘採時期は 4 月上旬から 5 月上旬である。

4.　静岡茶と鹿児島茶との比較

お茶の価格を決める際、需要と供給のバランスと茶葉の品質は静岡茶と鹿児島茶のどちらでも言えることである。なぜならペットボトルとティーバックはどちらの県にも同じように普及しており、若者の急須離れもどちらの県でも問題として取り上げられるからだ。だからどちらも需要と供給のバランスが崩れてきていると言える。品質にしても同じことが言える。

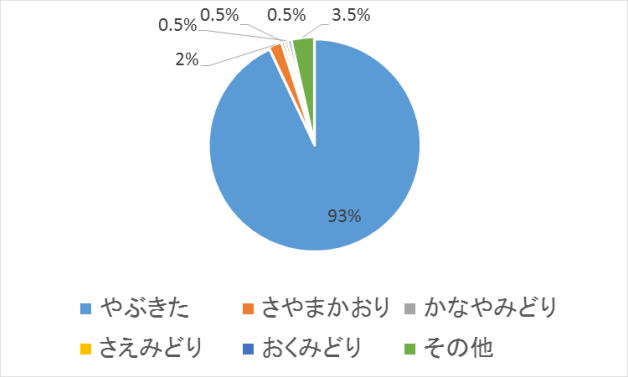
図表：8　全国緑茶品種普及率



出所　公益社団法人　鹿児島県茶業会議所より作成

図表：8 で示してある通り、現在全国で 1 番普及しているのは「やぶきた」という種類である。「やぶきた」は 1908 年に静岡県で開発され、それが主流になり急速に普及した。

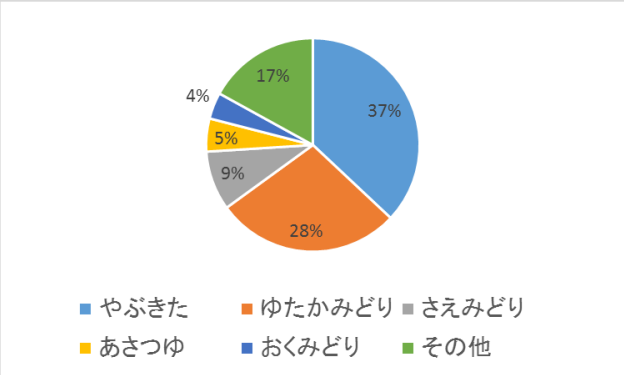
図表：9　平成 24 年度　静岡県　品種構成割合



出所　新品種、新技術の開発、保護、普及の方針、茶より作成

図表：9 で示してある通り、平成 24 年度の「やぶきた」普及率は静岡県では 93%もあり、静岡県の普及率は№1 である。

図表：10　平成 24 年度　鹿児島県　品種構成割合



出所　図表：9 に同じ

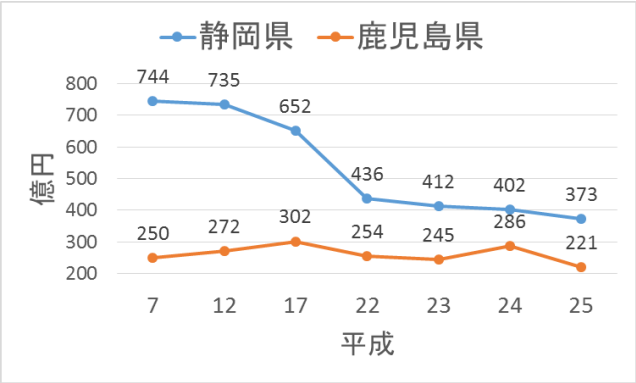
図表：１０で示してある通り、鹿児島県でも 37%と少ないものの鹿児島県でも普及率は№1 である。

説明した通り需要と供給のバランスと品質には大きな違いは見られなかった。そうなるとお茶の摘み取る時期に静岡茶の単価減少の原因があるのではないかと考えられる。ところで「お茶の価値は、お茶＝原料茶葉の質＋個性－欠点で出すことが出来る [5]」とも言われている。それに照らし合わせてみると原料茶葉の質と個性は静岡県のお茶も鹿児島県のお茶も極めて似ていると言える。やはり価値の違いが出るとすれば欠点ではないだろうか。そしてこの欠点にはお茶を摘み取る時期が当てはまると考えられる。もしそうならば静岡茶が鹿児島茶に何らかの影響を及ぼされていると仮定できる。

5.　環境が及ぼす影響

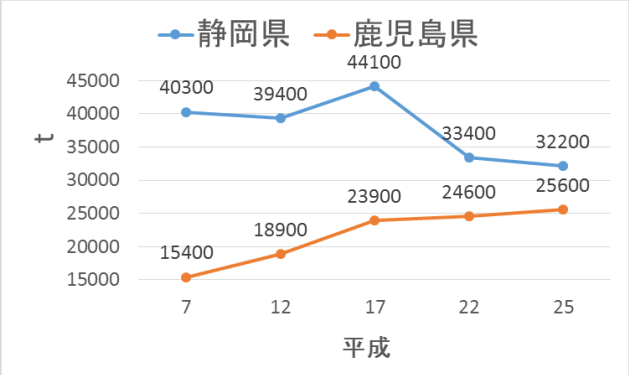
お茶を摘み取る時期によってどういった影響を受けているのか。多大な影響を受けているのは茶葉の価格ではないのかと考えられる。それをグラフで説明する。

図表：11　静岡茶と鹿児島茶の売上額



出所　図表：１に同じ

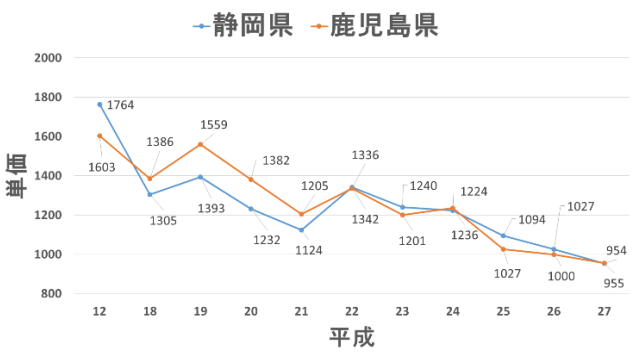
図表：12　静岡茶と鹿児島茶の荒茶生産量



出所　図表：１に同じ

図表：11 を見てもらうと静岡茶の売上は約半分まで下落している。しかし図表：12 を見てもらうとそこまで荒茶生産量はそこまで下落していないことが分かる　。この図表：11 と図表 12 を比べるとこのグラフは単価の減少を端的に表している。

図表：13　お茶の単価比較



出所　図表：1 に同じ

そして図表：13 を見てもらうと近年静岡茶と鹿児島茶の価格単価の差がどんどんなくなっていることが分かる。グラフの平成 27 年度の値を見てもらいたい。ここでは静岡県と鹿児島県の単価の差は 1 円しか変わらず、ほとんど一緒になったと言える。

6.　お茶栽培の好適条件 [6)]

お茶栽培の好適条件について記しておく。好適条件は大きく分けて 2 種類に分けられる。気象条件と土壌条件である。気象条件は全部で 4 つある。1 つ目として年平均気温が 12.5～13 度いじょうであること。14～16 度が適温である。2 つ目として 1 日の最低気温が 15 度以上の継続日数（作物期間）が少なくとも 80 日以上、平均気温 5 度以上の日数（植物期間）が少なくとも 210 日以上であること。3 つ目として年間の降水量は 1300～1400mm 以上で、育成期間の 4～9 月の降水量は 1000mm 以上であること。4 つ目として台風、雹（ひょう）、晩霜の常習地でないことが挙げられる。土壌条件も全部で 4 つある。 1 つ目として排水性、通気性がよく保水性も兼ね備えていること（茶園の土壌条件として最も大切なのは物理性で、特に排水性が茶園の育成に大きく影響している）。 2 つ目として根が生長、伸長できるような土壌（有効土層）の深さが最低 60cm、理想的には 1m以上であること。 3 つ目として土壌中の礫（れき）や粘土の割合が高くないこと。 4 つ目として土壌 pH は一般的な作物の好む pH6～7 より低い pH4～5 程度になっていることが挙げられる。

お茶は上記で示してある通り、気温や、土壌環境、天候などによって栽培しており、それを無視して摘採時期を早めたりすることは不可能に近い。この結果価格を決める際、鹿児島茶は日本一早く新茶を摘めることもあり自分達のいい値でつけることが出来る。それに比べて静岡茶は摘採時期を早めることが出来ないので鹿児島茶の評価の元、価格設定をしなければならない。いわば鹿児島県の設定単価に追随する。

この結果、静岡茶はブランドが確立されているが、摘採時期の関係上、価格主導権（プライスリーダーシップ）を取ることが出来ず、鹿児島茶の価格に静岡茶の価格を合わさざるをえないと考えられる。

7.　研究の到達点

お茶はいつでも作れる物ではなく、季節や天候、土などの環境によって左右されるものである。そして静岡茶は鹿児島県の日本一早く摘める新茶より早く摘むことは不可能に近い。その為お茶の価格を鹿児島県のいい値でつけられ、静岡茶もそれに合わした値段をつけなければならない。場所による影響が静岡茶の価格が下落している原因だと考えられる。本研究で明らかにしたかったことはこのことである。

静岡県の静岡茶は日本の№.1 のシェアを誇っている。しかしながら№.1 のシェアを誇っていてもお茶の場合は価格主導権を握ることは出来ていない。

工業製品などの場合は、通常、№.1 のシェアを持っているところが価格決定力を握っていると考えられている。価格主導権（プライスリーダーシップ)と言われているものだ。
しかし、静岡茶は緑茶市場におけるトップ銘柄であるにも関わらず、価格は鹿児島茶への追随を余儀なくされている。摘採時期などによって価格主導権が左右されることを知った。

トップシェアにも関わらず価格主導権を握れずにいる状況がお茶農家の経営の圧迫に繋がっているのかもしれない。そのことが、静岡茶のシェアの減少の要因の 1 つとして言えるかもしれない。

トップシェアにも関わらず時期によって価格主導権を握ることができなくなる現象は他の農産物にも見られる可能性がある。もしそうなら、工業製品と農業製品の価格決定のあり方はかなり違うと考えられる。

最後に本研究は、従来明らかにされていなかった価格決

定のあり方を問い、興味ある事実を抽出できた。

注

[1]「経済学辞典　第３版」より

[2]「スマートブルー株式会社　ブログ」より

[3]「みのり園」より

[4]「お茶博物館」より

[5]「お茶専門店　HOJO ホームページ」より

[6]「お茶百貨」より

参考文献

・『大阪市立大学経済研究所編経済学辞典　第３版』　岩波書店　1992 年

・ふじのくに　静岡県公式ホームページ　お茶白書

https://www.pref.shizuoka.jp/sangyou/sa-340/ochahakusho.html

・お茶のみのり園

http://minorien.jp/chishiki/nedan.html

・伊藤園

https://www.itoen.co.jp/files/user/pdf/ir/material/201410.pdf

・公益社団法人　鹿児島県茶業会議所

http://www.ocha-kagoshima.jp/information/tokucho.html

・新品種、新技術の開発、保護、普及の方針、茶

http://www.maff.go.jp/j/kanbo/kihyo03/gityo/tuyomi/pdf/05-02tya.pdf

・Google　画像

https://www.google.co.jp/search?q=%E3%81%8A%E8%8C%B6%E7%A8%AE%E9%A1%9E&rlz=1C1OPRB_enJP538JP539&espv=2&biw=1920&bih=974&source=lnms&tbm=isch&sa=X&ved=0ahUKEwj46N7Bu4LSAhWEgLwKHbsLCGkQ_AUIBigB#imgrc=4PTOcF4yr5HeJM:

・お茶百貨

http://ocha.tv/varieties/nihoncha_varieties/

・お茶百貨

http://www.ocha.tv/how_tea_is_made/cultivation/

・スマートブルー株式会社　ブログより借用

http://smartblue.jp/sizuokacha-shourai-zou/

・お茶専門店 HOJO　ホームページ

http://hojotea.com/jp/posts-827/

・お茶の博物館

http://www.kaburagien.co.jp/museum/museum/museum12.php

・2016 年 11 月 28 日　お茶農家聞き取り